黒煙が繁栄の証だった頃
ー 煙突のある風景・常滑 ー

■足袋底が真っ黒になった

常滑と言えば、今でこそ空港の町だが、かつては土管の町として栄えていた。町中に煙突が林立し、真っ黒な煙を吐く風景は、常滑を象徴する風景であった。常滑に嫁いできた新婦の真っ白な足袋が、一日で真っ黒になったというエピソードは語り草となっている。煙突から吐き出される細かい石炭殻が町中に降り積もり、それが繁栄の証として受け入れていた時代でもあった。

しかし、煤煙による公害問題とトンネル窯の導入によって、昭和50年代には石炭燃料の窯に終止符が打たれる。繁栄の象徴でもあった煙突群は、今は「煙突のある風景」として産業景観ともなっている。

常滑駅の土管と煙突群（常滑市民俗資料館蔵）

■土管づくりに欠かせなかった角窯（石炭窯）

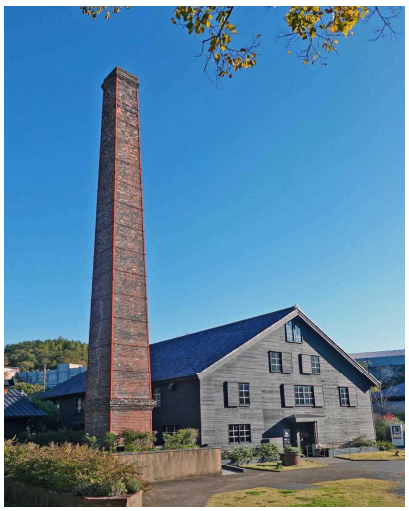
角窯を展示スペースに利用した土産物屋
（2004.3 筆者撮影）

常滑は日本の六古窯の一つとして知られ、朱泥焼に代表される陶器の町として繁栄を続けてきた。大きく事態が動いたのは、明治初期に横浜の下水道管に常滑の土管が使われたときであった。これが土管の町として大きく飛躍するきっかけとなった。

土管づくりでは大きな窯が欠かせない。窯全体に行き渡る焔の流れも重要である。開発されたのが倒焔式角窯（略して角窯）と呼ばれる大型の煉瓦製の窯である。燃料に石炭が使われ、石炭窯とも呼ばれた。その石炭を効率よく燃焼させるため高い煙突が必要であった。それが300～400本あったと言われる。

■産業遺産となる煙突と角窯

現在、常滑で角窯が稼働するところは一つもない。煙突も大幅に減らしている。それでも町中には、途中で切られた煙突を含め、20本余りが残され、煙突のある町、常滑の風景を保っている。



窯のある広場･資料館と煙突（建物内に角窯）（2023.11 筆者撮影）

煉瓦製の煙突と角窯を備える工場建物を資料館とした「窯のある広場･資料館」（登録有形文化財）、10本の独特な煙突を持つ連房式登窯の「陶栄窯」（重要文化財）も存在する。観光名所「やきもの散歩道」を歩くと、かつての角窯を利用した土産物屋もある。煉瓦製の煙突を間近で見上げることもできる。「窯のある風景」、「煙突のある風景」は、これからも常滑を彩る風景として、生き続けて行くであろう。

常滑に残る角窯の煉瓦煙突（2023.11 筆者撮影）

（天野武弘）